

可認物便郵種三第省信遞日六廿月二十年一十三治明
(行發〔日五十、日一〕回二月每)行發日五十月二年五十三治明



報時教政

號 三 十 七 第

目次

社 說

政黨撲滅論

論 說

貧民窟の宗教

社 會

◎軍隊の凍死◎軍人分捕事件の暴露◎平凡なる議會◎骨牌税、
禁酒法案◎宗教法と政府者及宗教委員◎教壇彙報◎紛々録

雜 錄

放 言

前 田 利 家

信 界

智 識 と 疑 惑

家 庭

育 兒 談

安藤鐵腹

鎮屯漢

百目木劍虹

赤松天風

文學士白山生

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神の結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

社 論 會 說

- 政教時報第七十二號目次
- ◎慈善問題と勞働問題……………(文學士和田鼎)
 - ◎危險なる風潮……………(文學士和田鼎)
 - ◎鑛毒被害地視察の記◎宗教法案◎教界彙報◎紛々錄……………(文學士本多高陽)
 - ◎先德餘香(其十)……………(藤波一四)
 - ◎飛花落葉……………(文學士清澤瀧)
 - ◎自由の念……………(お茶の水人)
 - ◎教會の一夜……………(お茶の水人)
 - ◎遊三日記(續)……………(東京悦日庵)

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(二日、十五日)發行とす
 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
 一、本誌代金は必ず小爲替にて送送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全 國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十五年二月十四日印刷
 明治三十五年二月十五日發行

印刷編輯人 清水明太郎

政 教 時 報

政 黨 撲 滅 論

既に藩閥撲滅論あり、また淫祠撲滅論あり、豈に政黨撲滅論なくして可ならんや、

願ふに彼の藩閥の弊の如き机上の論客は舌を爛らして其打破に力め紙上の操觚者また筆を秃にして其撲滅を唱導してよりこゝに年を閲すること已に十餘、然も藩閥は尙依然として其勢力を廟室に維持し、伊藤系と稱し山縣系と號し所謂元老株の威勢向類の侮り難きものあり、是の如きは抑も何の故ぞ、藩閥の實力よく世界的日本の大政を料理するに堪ゆるものあるによるか、あらず、頑迷の頭惱老耄の手腕小なる舊日本の經綸に於て僅かに可なりしもの、何ぞ膨脹的新日本の大政を左右するに適せんや、彼等の疲脚は到底日新の進運に伴ふ能はず焦心徒らに盛んにして力之に適はず、空しく往時の盛を追憶して嗟歎の太息を漏らすに過ぎざるなり、嘗彼等の餘喘殘喘を保つ所以のものに彼等が過去の勳功に伴ふ形式的威嚴と價少き經驗所謂烏賊の甲に比せらるゝ年の功とによるのみ、是の如きは畢竟一個無意義の形骸のみ以て藩閥の命脈に向て幾何の助をか爲さん、吾人の見る所を以てして誤なからしめば、彼等が尙今日其勢力を持する所以のもの全く政黨そのものの、修養に缺くるものありて然るなり、今の所謂政黨な

政 教 時 報

るものを見よ彼等の眼中只私利ありて國家なく私幸之れ貪つて民福なく、更に何等の經綸と何等の實力とを有せずして政權の爭奪是事とし一朝政權の攫取によりて名利併せ占めんとするに過ぎず、彼等が舌を爛し筆を秃にして嚮々として藩閥の打破を全うせんとする所以のもの畢竟これのみ、藩閥の存在が新日本の大政に適せざるが故に之を撲滅すべしといふに非ず、藩閥の持續が國利民福の増進に有害なるが故に之を倒すべしといふに非ず、只名聲と利得とを貪らんが爲めに喧嘩するあるのみ、其聲の徒らに大にして然も其効果の見るに足らざるもの洵に所以ありといふべし、政黨の價値なきは毫も藩閥の夫れと更に何等の差異なきもの、寧ろ其國家を思ふの誠意に到りては藩閥諸公は遙かにかの職々たる政黨員に勝ること萬々なり、藩閥を倒して代うるに政黨を以てす、所謂暴を以て暴に代うるもの惡を以て惡に代うるもの途に其可なるを知らざるなり、藩閥撲滅の如き腐敗墮落したる政黨の空論によりて之を倒さんよりは、加かす之を凡ての破壊者たる時に委せんには、公明正大なる時の手は絶えず藩閥の破壊に加はりつゝあるに非ずや、自家實力の修養を力めずして漫然取つて代らんとする政黨者流の短見は眞に笑ふべきなり、政黨の眞價にして認めらるゝを得んか藩閥の如きは畢竟朝日に消ゆる霜の如きのみ、

かの淫祠の害毒の如き慘惻なる宗教者は口を齊しうして其妄誕不稽なるを詈り、筆鋒を鋭にし正々堂々の論議によりて之を撲滅せんとす、而も淫祠の害毒は却て年と共と注流し、

世を擧げて皆この惡魔の餌食たらんとするの状あり、曰く進門、曰く天理、曰くアウンバラマ、曰く何、曰く何、上は有爵の貴婦人より、下は裏店の山の神に至る迄、滔々として皆是等淫祠の爲めに迷の海に沈溺しつゝあるが如し、法令取締を以て萬能と信する役人は、繁瑣なる法令を設けて之を取締らんとするも法令愈々繁くして淫祠の繁昌は更に異るところなく、取締益厳にして迷信の徒は日に其數を増加す、是の如きは抑も何の故ぞ、迷信の勢力偉大にして到底之を撲滅すること能はざるによるか、あらず、荒誕不稽なるかの淫祠何ぞしかく確乎たる根底を有するものならんや、彼等は人類の弱點に乗じて之を蠱惑するのみ、其蠱惑せらるゝ所以のものは畢竟眞信の欠乏に基く自覺の缺損に基因するのみ、而して是を責むる宗教者の態度が單に其表面の教義を論破して之を撲滅せんとするに出づると、爲政者の處分が單に其外形に對する取締に出づると、共に大に誤れるものと言はざる可らず、願ふに百の論議千の取締畢竟彼等に於て何等の痛傷するところぞ、彼等の立場は幽玄なる哲學に非ず、理論上の攻撃は東風の馬耳に於けるが如きのみ、彼等の巧妙なる布教は又恰憐なる役人の目を抜くこと江戸兒の生馬の眼を抜くこと一般、一令一通、一法一逃巧に法網を免れて隨處に害毒を流すこと殆んど神に近きものあり、之が撲滅を根本的たらしむるは然く消極的方法に出つべからず、宗教者は彼等を攻撃するの力を轉じて以て眞信の樹立を力め爲政者は取締を調査するの時を利して教育の普及に全力を注がば、彼れ荒誕不稽の淫祠の如

き烟の風に散するが如く、漸次其魔力を社會の上に杜絶するを得ん、

獨り政黨の弊害に至りては其國家社會に及ぼす害毒の慘豈に當に前二者の比ならんや、其廣さに於て其深さに於て又其長さに於て殆んど計る可らざるものありて存す、ポンドノスチエフ氏の議院政治の弊ルイポール氏の政治罪惡論共にこの一大惡魔の性質を暴露して以て世の盲目の徒を警醒したるの論眞乎近來稀に見るの痛快事何物の快心か之に過ぎんや、然も十九世紀の勢州に於ける佛國大革命の影響以來、歐米の各國皆例を大英國の議院制度に取り以て國家の最も進歩したる制度となす、奚ぞ知らんこはアングロサクソンの特性と其歴史とによりて自然に發生したる一種の國家制度に過ぎざるを、議院政治の如き畢竟英國の歴史を見て始めて其可なるを見るのみ、國民の特性と其智識の程度と其歴史とを異にするの國家が、徒らに他の美を羨して之を模倣せんとするが如きは眞に嗤ふべきの短見のみ世に其實を具へずして其形を移さんとするものは誤れるかな、諺ふ日本の歴史を之を語らしめよ、

眼を開て日本の歴史を達觀せよ、日本は實に「制度倒れ」の國なり、而して其制度は概ね皆外邦の傳來物のみ、日本古代の一大法典として珍重せらるゝ大寶令は入唐當時のハイカラによりて輸入せられたる唐の六典に非ずや、當時唐の粲然たる文物は入唐の田舍漢をして如何に垂涎せしめしぞ、洋行歸への伊藤井上等の諸公がチヨンマダを切放ちて、柳原流の洋

裝に得々として歐洲の文物を輸入したるに比し更に一層の奇觀なりしならん、知識の進歩未だ甚だ幼稚なりし國民に冠らしむるに直ちに唐制を以てしたるもの當時其實際に於て果して幾何の運用と實効とを收めたるか、制度徒らに供はりて國民の知識之に伴はざりしは照々乎として明かなり、爾後幾百年幾分の變更ありしと雖ども、鎌倉幕府の創立に至るまで遂にこの唐制の鑄形に徹められたる日本は全く自國の眞價を失ひて支那の附庸國たりしの觀なしとせず、鎌倉幕府に至り國民の自覺漸く起りて、日本國民は實用的制度を見るに至り、爾後徳川幕府に至るまで之を維持したりと雖ども文明を受賣に得たる日本は再び異種の文明を受賣するの運に遭逢し、日本從來獨特の制度は其利害の如何を顧みず、恰かも弊履を擲つが如く放棄し獨英米佛等の制度を輸入し來りて再び大化時代の二の舞を演ずるに至り、政治教育を始め諸般の制度皆悉く之を泰西に倣ひ制度又制度年々歳々制度の變更是力めて古來の歴史と習慣とを無視し今や殆んど制度の繁に堪へざらんとす、父母も戸主の權力によりて放逐する事を得るの民法あればストライキによりて教師を放逐するを得る教育制度あり、自治制を布くに當りて之に説明を附するの一大奇觀あり、制度日に滋くして國政日に衰ふるものは豈に夫れ吾邦の現狀に非ずや、「制度倒れ」の國といふもの決して一時の激語に非ざるなり、而して是等百般の制度中其弊の最大最深なるものは洵に政黨にあり、吾人は英國の如くにして初めて政黨の眞價を認め、他は皆いふに足らざるなり、况んや受賣後日尙淺き日本封建制度より一躍して立憲制を眞似たる日本

の政黨の如き殊に其甚しきものといはざる可らず、然りと雖ども吾人は眞の政黨を撲滅すべしといふに非ず、今の所謂政黨を撲滅せんと欲するものなり、嗟呼藩閥をして今少しく勇氣あらしめば、國民をして自覺の念を喚起する事を得せしめば、二者共に今の時に望み難しこゝに至りて吾人はこの腐敗し墮落したる政黨を撲滅して専ら專制の昔に歸へらんことを望まざるを得ず、然りと雖ども國を擧げて醉へるの時代はまた如何ともすべからざるものあり、百歩を譲りて議院政治を寛容せんか、然も今の所謂政黨は斷然之を撲滅して眞の政黨を樹立するは論に刻下の最大急務たるを失はず、撲滅なるかな、撲滅なるかな

腐敗墮落の極に達したる罪惡の政黨を撲滅して後日本は始めて安泰なるを得ん、吾人はこの點に於て固き確信を有す、庶幾くは佛敎の信仰によりて眞乎に國家の大政に參し國民富を増進するに足るの政黨を樹立せんことを、かの藩閥の如き淫祠の如き時の手によりて容易に之を葬るを得ん、當この政黨に至りては極力之が撲滅に力を致し、一方に眞政黨の成立を促して以て國家百年の大計を畫策するものは眞に現代佛敎徒の一大責任に非ずや、起て幾百萬の佛敎徒醒めよ四千萬の同朋、國家の爲めに罪惡の政黨と闘つて悉く之を奈落の底に葬れ、惡魔外道の降伏は佛天の命なり、撲滅なるかな、撲滅なるかな。

志といふは、この存主する所にして、氣をひきゆるものなり、孟子に志氣之帥也といへり、師といふは將帥の發して、大將の事なり、志は氣を引まはすものなれば、大將の士卒を引まはすの如し、ゆへに氣の帥なりといへり、このあるしなかりて氣を引たつものなり 伊藤東涯

貧民窟の宗教

安藤 鐵腸

論 説

貧民窟の宗教といふたところで、貧民窟取り切りの特殊の宗教のあるのではない、固より宗教は個人信仰であるから、その間に貴賤貧富を分つべき筈がない、長者町だとして、貧民窟だとして、他の地位や、名譽や、權力や、階級や、財産や、智識や、有らゆる差別の境を超越して、同一平等の自由を得るのが宗教の信仰である、けれども人の趣味、嗜好が、その社會によつて異なるが如くに、大體から觀察すれば、また他の社會と異なる宗教觀念がないではない、

日本人は總體に宗教に冷淡である、貴紳豪富と雖、宗教に對して敬虔なる態度を有するものは極めて少い、が貧民は宗教に對しては一層冷淡で、殆んど何等の考があいと言つてよい、衣食足て禮節を知るといふ、宗教は禮節よりも一層深い、程遠いものである、既に衣食足らずして、今日の禮節をさへ顧る暇がない、何ぞ況んや衣食に疎き、程遠き宗教について考ふるの餘裕があるや、「大患に罹れるものは幸福なり」との古の人の言もありて、大病に罹りたる人は、始めて死の近づきたるに驚き起て、人事の様にして居たものが、今は自家頭上に落ち來らんとするに怖れをいだき、煩悶に煩悶を重ねて、

つ、大道に物をして居るを見た最早彼等には、タバコを廢し、アンカを止め、罷勉努力してこの淺ましい境界を脱せんと志はない、もらへばもらふに従ひ、現在口腹の慾を充たして以てその境界に安んじて居るのである、かういふ次第であるから従て彼等は神佛に祈誓を籠めて、一心に立身出世を望まんとするの考もない、はじめは自暴自棄したものであろう、それが「住めば都」で一度貧民窟に足を止めて、一月立ち二月立ち、一年を經、二年を過ぎて、遂に貧民根性になりて、出精して身を立てやうとの意を失ひ、なんでも体を勞せずして食ていきたいといふ考になつたのである、それ故彼等の仲間には現世祈禱といふことも、餘り多く行われぬ、即ち劣等なる宗教觀念すらないのである (未完)

社 會

軍隊の凍死

天下悲惨の事多し、然れども今回青森縣下に於ける軍隊凍死事件の如き慘の最も慘なるもの、他日事あるや一死國に報ひ、彈丸飛雨の下をくぐり白刃篠つく間を越へて、奮闘勇戦の偉勳を奏すべき忠良なる我兵勇をして、苦むる者は敵兵にあらず命を隕すは戰場にあらず、僅に一泊の行軍に道を失し空しく蝟々たる積雪の下に埋没され、殆んど二百餘名の全隊を擧げて名なき凍死の悲劇を演せしむ慘と云はすして可なら

始めて宗教の眞味を知るに至る事であるが、甚しき病苦に責めらるゝ時は、その苦痛のために、當座の苦しみを脱せんと考へのみ急にして、宗教をたどり、安心を求めんと心は出ない、それと同じく人情の常として、流離落魄の悲境に陥るときは、深く人生の否塞に翻じ、厭世の傾を生じ、却てそれが逆縁となりて、宗教に入るものであるが、落魄もその極に達し、貧困もその度を越ゆれば、當座の貧苦を脱せんどの心のみ急にして、衣食の道には程遠き宗教あぞには考へ及ばないのである、殊に貧民は慨して教育がない、智識を以て人物の價に高下の別をつくるものとせば、貧民はたしかに下等人物に相違ない、故に彼等は深く自己省察をして宗教の門戸に入るといふこともないのである、要するに彼等は現在の貧苦を救ふに急にして、それ以外のことは殆んど心頭に上らない、況んや普通の人の考として、現在の世渡りに直接ならざる宗教に於ては尙更である、

彼等の常として多く、その境界に安んじ、一日一日その日を暮らして、他日の計を爲すが如きものは、極めて少ない、奮然として志を立て、切礎琢磨するといふが如きは、殆んどないのである、「乙食も三日すれば忘られぬ」といふは實に至言といはねばならぬ、此頃兩國橋を通り過ぎた、橋の袂に一人のまだうら若い乞食がこもを被つて頻りに道行く人に哀れを乞ふて居る、能く見れば煙草をブカク吹かしながら頭を下げたり上げたりして居るのである、又淺草公園を散歩した、一人の女乞食が七八歳の小兒と共にアンカに膝を温め

入或は用意の周到を欠き舉措機宜を失するを云ふものありと雖も、こは指揮者の過ちなり、上官の命令の外軍隊にはま何物もなし、以て凍死の兵勇を云々するは未だ事に通せざるものなり、彼等が紛々たる飛雪に進退を失ひ饑寒交々至る危急の間に處して尙能く隊長の指揮を奉じて戻らず、死に至るまで隊長を擁護するを聞て誰か規律の嚴肅と敬愛の熱情を稱せざるべき、此の如き軍隊あり始めて百萬の敵兵眼前に迫るも自若として畏るゝの要なきなり、而して今や此の貴き忠良なる二百有餘の兵勇は、あはれ雪中に凍死して天下を擧げて痛惜の念に耐えざらしむ、彼等の中には父母あるものあり兄弟あるもの妻子あるものまたありしならむ、その將に命を終らむとする際念頭に浮びしものは何なりしか、また此悲報に接したる遺族の痛嘆は如何ばかりぞ、然ども死者再び歸らずたゞ吾人は特に宗教家に向ひ厚く凍死の忠魂を弔ひ深く遺族の悲嘆を慰められんことを望むと共に軍隊に向ては將來を慎むで過ちを重ねるなからんを欲するの外また他なきを悲む

軍人分捕事件の暴露

近事の二大問題は第八師團第五聯隊の軍隊凍死事件と廣島に於ける軍人分捕事件の暴露はなり、一は國家の爲め忠勇なる多くの將校士卒を失ふを悲むと共に、一は國家の不名譽を

思ひ痛く慷慨の情に堪へざるあり
 北清事件に於ける我軍隊が無上の名譽を中外に發揚せしは
 軍規の嚴肅によらずんばあるべからず、然るは何事ぞ下士卒
 の模範たるべき將校たる軍人が自ら軍律を冒して、火事場の
 盜賊の所爲をなし恬として耻ぢざるが如きは、名譽ある軍人
 而も教育ある軍人の爲す所ならんや、錢を愛する武臣馬ぞ一
 旦緩急あるの際生命を鴻毛の輕きに比し、君國の爲め奉効す
 るものあらんや、國民の義勇的精神を代表するものは軍隊に
 わらずや、軍隊の名譽は國民の名譽なり、總て國家の名譽な
 り、軍隊の名譽は國民の名譽なり、總て國家の名譽なり、
 軍人分捕事件は久しく社會の輿論となりしが今や端なく
 暴露せられて第五師團長山口素臣以下の將校が家宅搜索を受
 くるに至れり、軍人の名譽茲に至りて極まれり云ふべし
 國家の名譽も亦之より甚しきはなからん、事此に至る姑息
 の策を用るす曖昧の間に葬らず、事件の真相をして明白なら
 しめ、公明正大に其處分を行はれんことを望む

平凡なる議會

憲法を布きてより茲に十有餘歲、議會を開會するも既に
 十六に及ぶ、年を追ふて議會は平凡に流れ人心漸く倦み來り
 て人は重きを議會に措かざるの傾向を生し來りぬ洵に奇怪な
 る現象と云はざるを得ず、今年の議會の如き平凡は蓋し類な
 からん、國家重要なる議案と雖も之を慎重に討議せずして、

匆々に附し去る仕末なり、本期議會は既に其開期の半數以上
 を経過したるにも拘らず、議事を開くこと僅に十二三回に過
 ぎず、苟も國務を料理する議員の取るべき行爲ならんや、單に
 職務に不忠實なるのみならず、彼等議員は常に敗徳汚行を敢
 てして顧みざるに至りては、言語同斷沙汰の限りと云はざる
 べからず、現に雞卵輸入税法案に就て一種の運動起り、遂に
 惡臭を放つに至れり、如斯年々議會をして腐敗せしむるに至
 らば國家の前途を果して奈何、宜しく反省して可也

骨牌稅、禁酒法案

骨牌稅は政府より衆議院に提出したる新奇の法案なり、政
 府者の説明によれば賭博稅にあらざると雖も、今日の習慣にて
 は公然の秘密として骨牌を他用しつゝあるなり、之に賦課す
 るハ賭博公許の議は免る、こと能はざる也、如何に財政を重
 する國家と雖も少しく眼を社會風教の點に注がれんとを望む
 又禁酒法案は議員根本某より提出したる法案にして、細事
 細行に至る迄法律を以て束縛せんとするが如きは到底不可能
 に屬す、案は可也、たゞそれ行はれざるを如何にせん
 要するに二法案は兒戲に類して滑稽に近きもの、これ吾輩
 の贊する能はざる所以なり

宗教法と政府者及び各宗委員

風を報道したる宗教法に就ては各宗委員七名は東上し、既
 中本會派員として安藤鐵腸氏、越中東西兩會支部の招團により去る十三日四
 地へ向け出發したり

紛々録

●市内各所に据付たる自動電話の料金やら、金物を剥き取り
 て盜むもの近來頻繁なりと云ふ、怪むをやめよ上に分捕將校
 あり下流豈に之を傲はざらんや、日本はげに盜賊國なる哉
 ●名古屋市に一乞食の老婆あり、彼の死後古びたる蠟燭箱よ
 り明治銀行、尾張銀行、名古屋郵便電信局等の貯金通帳と額
 面五百圓の公債證書一枚とを發見し、之を計算したるに千三
 百圓以上の遺産なりと、驚くべき貯蓄に富みたる老婆なり、
 而して遺産處分に付て捫心を生ぜりと、此等の人こそ乞食の
 上手(まね)と云ふべけれ恐しき世なる哉
 ●「精神界」の諸先生方に目白邊に移轉をすむるものあり、
 其理由を問へば目白には雲照律師あり、アウンバラマあり、
 天主教あり、其隣りには巢鴨癡院あるにあらざるや、精神
 主義を唱ふるにこれ究竟の地なり、只名高き目白の化物屋敷
 は高田早苗氏の占領する所となりたるを惜むのみと語り終り
 て又他をいはず、吾人は其意のある所を知らずと雖も、諸先
 生方果して首肯するや否や

成の案を具して頃日來當局者を訪ふて、種々意見を叩きつゝ
 あるも、未だ要領を得るに至らざる由、政府も既に調査しつ
 々ある事なれば、あまり秘密の下に隠れず互に胸襟を開きて
 協議會を開くこそ、双方の爲め頗る安全の策ならん、政府當
 局者以て如何となす

教界彙報

●本會々頭久我侯爵は本會擴張の爲め本月廿日より左の日程の豫定を以て巡回の
 事に確定す
 廿日 靜岡
 廿一日 岡崎
 廿二日 桑名
 廿三日 津
 廿四日 名古屋
 廿五日 岐阜
 廿六日 大垣

台巡回終りて一旦歸京の上再び北陸地方巡回の途に就く筈なり、尙本會よりは
 本多展一郎、日本智運の二氏一行に加はる筈なり
 ●大谷會にては愈々會堂建築の概を發し寄附金募集に着手せり、委員長は南條文
 雄師にして其額一萬圓の豫算なり
 ●本會々員安藤鐵腸氏は此度日出新聞社より聘せられたり
 ●大日本佛敎青年會にては東死軍隊の遺族を救助せん爲め來月九日七野音樂學校
 にて慈善音樂會を開き其純收入を擧げて遺族に贈る由、美譽云ふべし
 ●藤岡文學士は客冬十二月三十日伯林に若し其夜近角文學士と共に直に手を携へ
 て伯林市街を遺通し故國の物語を、懷舊の情に堪へざる旨報し越せり
 ●眞岡文學士は郷里にありて無事法務に従事し居らる、由
 ●文學士中尾敬敏氏は僧籍のまゝ、北村氏の繼嗣となり、去る五日其令嬢と華燭の
 典を擧げたる由
 ●文學士堀誠徳氏は水月哲英氏の後任者として本派本願寺より米國布教主任を命
 ぜられ不日渡米する筈
 ●久しく在藤岡院に入院中なりし鎌倉圓覺寺常長禪宗演師は病氣全快の上此程歸
 山したり

●「通俗佛敎」に毎號連載しつゝある佛敎文士の側面觀の一文
 は、安藤鐵腸氏の筆ならんと云ふものあれども、同氏は少しも
 之を知らずと語りぬ、何人の惡戯にや

◎世には親切なる人あり、イヂワルキ人あり、位好の者、忠實なる者あり、蓋し世は様々なる哉

雑録

放言

鎮屯漢

◎放言は何と言ふことなしに、唯出鱈目勝負に出放題を並べ立てるのである、ド一七此放言に觸れたら、灰神樂の傍に居る様あもので、迷惑は少からぬことであらう、讀んで怒り給ふもあべく、罵り給ふもあべく、叱り給ふもあべく、一笑に付し給ふもあべく、又我聞せず焉と、これしきの事に心を動かし給はぬエラキ豪傑もあべし、愉快がり給ふ人、喜び給ふ人、氣味善がり給ふ人、賛成し給ふ人あは有りや無しや、固より保證の限りにあらず。始めより一讀の勞をも取らぬ人も亦固よりないに違ひ無いが、マーンナ事はドチラデも可し、

◎扱何から言ひ出さうか、遠い親類より近い隣といふから、隣保は互に中善く助け合はねばならぬ筈であるが、實際兎角近所の事は噂のし度いもので、隣の店が餘り繁昌すれば妬ましい、隣が餘り儲け出せば羨ましい、隣が餘り名譽を得れば妬しくない、漢も此頃はチト此ヒガミ根柢が出て來たのか、燒餅病に取り付かれたのか、御隣の精神主義の先生方が「身を宗教家の内に置かざる操觚者中尤も私共の意に近き説

を爲す者は「太陽」の高山林次郎氏に候「おど、ニイツチ主義と相呼應じて、我國の精神界を振撼せしめつゝあらる、御盛サが滅、浩々洞の御店が繁昌して、「新佛教」「六條學報」、無盡燈等より續々御客のあるのは、何とか尻馬に付て噂をして見度くてたまらない様な氣がする、勿論是は遠交近攻などいふ、張祿先生の故智を學んだでも無ければ、此漢は又ソソナ惡漢でも無し、

◎噂のし度くてたまら無いものに對して、如來は勿論噂してはあらずといは仰るまいから、遠慮は咽の煩ひ、思た儘をソコガ放言の放言たる所だ、わるけりやあやまる斗りサ、

◎近來如來は殊の外物好きになり給ひて、浩々洞の一派をして頻りに精神主義なる新名目のテウヘンなアキラメ主義を唱へしめ給ひ、夫を又一部の人々をして、ムキに成て怒らしめ給ひ、躍起に成て攻撃せしめ給ひ、又一部の人をしてイヤに氣障に感せしめ給ひ、其光明がるのを偽善らしく思はしめ給ふ、人のワルイ話ながら、此對戦を高身で見物し給ふ如來は、無面白事であらう、御蔭で言論界の寂寞を破て漢等も傍聴傍觀を許され、外の面白い、夫に付ても如來の御恩は思はねばなるまいか、

◎此等の論戰はドチラに軍扇が揚るか、否如來はドチラに軍配を揚げしめ給ふか、漢などの恃度の出來る話で無いけれど、ムキになり、躍起になり、真かうかざして打て掛る方は負け、馬耳東風と聞き流して外の方を向て、獨語をして居る方は勝つであらう、否如來が勝たしめ給はるであらう、併し

今後浩々洞諸氏に如何なる態度を取らしめ給ふか、如來の御意は推し量らぬ方が善からう、

◎精神主義、内觀主義なる新名目のアキラメ主義は、誠に面白い所がある、善惡邪正の問題と、宗教の問題とは全く別物ありとの見解よりして、殺生、偷盜、邪淫等も、性情之を好む者には敢て之を止めよと言はずと、大膽に喝破する所は餘程愉快である、是等は一派の哲學先生などが宗教と倫理道德とを同視して、宗教の骨目眞髓は倫理である、道德教の外に宗教は不要のものである、宗教も是からは改革して倫理教とするが善いなど、言はる、味噌糞ゴツタ交せの誤迷論を警擧するには極めて適切な藥劑である、誤迷論者もよく呑み込んで、急度利き目が有るだらう、願くば如來は浩々洞諸氏をして、根柢よく此主義の鼓吹に盡力せしめ給はんことを

◎併し此精神主義なるものは、其名の新奇なるに驚いて、其説自身も如何にも斬新なり、其主義の實質内容も新奇なりと驚いたり感心したりするのは、全く名の新しきに眩惑せられて買かぶつて居るのである、僕等の見る所からいふと、僻目かは知らぬが、精神主義といふは、陳々腐々昔々大昔より在り來りの舊主義舊思想に外ならぬ様に思へる、

◎新佛教記者などは、何やら系圖を引張て、精神主義はニツチ主義と系統を同じくするとか言て、耶蘇教の内村鑑三氏本能満足主義のニツチを崇拜する高山林次郎氏等と清澤滿之氏は同種の人だと、人の腹の中を三遍も飯潜りでもして來た様な申分であるが、成程或點に於てそう言ふ近似もあるであ

らう、現に「精神界」記者も我等と思想の最近の主義を有するは高山樗牛なりと自白して居る位であるから、併し精神主義の諸先生方がニツチ主義を奉ずると思へぬ、漢の一隻眼で睨んだ所から憶面なしに評して見様なら、精神主義を唱道する人は清澤大和尚を始め、トルストイの説にカブレテ居るのではあるまいかと思へる、トルストイが現在の社會を自由な不自然な社會として、之を擯け、理想の社會を唱道するのにド一も似たる所が有る様に思へる、併しトルストイの思想を輸入し宣傳するをいふなら猶之れは斬新なので有て、夫程舊々思想と云へぬ、之を段々遡て淵源を釋ねるなら、思たよりも猶古い所にあるだらうと思ふ、 (つゝ)

前田利家

百日本劍虹

緒論

天下の英雄、雲の如く起り、四方に割據して各爪牙を磨き、互に吞噬搏奪を事とし、殆ど寧日なく所謂弱肉強食は戰國爭亂の慣習となりぬ、豈此間に紀綱の存するあらむや、道義の認むるあらむや、只見る、天地晦冥、四邊暗黒、修羅の巷と化し去るを、我國應仁以還の騷亂の如き、實に此暗黒の最高潮に達したるものなりき、或は君を弑し領域を掠め、或は主を逐ひて自立する者、或は親を殺して歡心を貪り、或は子を質として、敵を欺き、虎視眈々、隙に乘し以て私慾を充さむとする者比々皆然らざるはなし、何ぞ怪むに足らむ、而し

て此暗黒中に一點の光輝赫々として射殺するものあり、光輝とは何ぞや主従の關係是なり。

彼の一世の雄たる北條早雲嘗て曰く、英雄は人心を綜攬するにありと、人心の綜攬は乃ち赤心を人の腹中に推すにあり、如斯にして氣骨稜々の武士と雖も誰か其意氣に感せずらむや、魏徵曰く「人生感意氣。功名誰復論」と、人生既に意氣に感せず、何ぞ區々の名譽に拘泥するものあらむや、昔し諸葛武侯、草廬三顧の知遇に感じ、以て天下三分の計を献じ、漢室の興業に營々汲々たるもの、畢竟人生意氣に感するの反動にあらざるはなし、縦令意氣に感するの士あるも主其人にして、英雄の大度なくむば、又以て曠世の業を成すこと能はず、彼の項羽に於ける范增を見よ、力山を抜き、氣世を蓋ふの勇あり、惜哉、好漢人心を綜攬するの器なく、一の亞父ありと雖も、其材を用ふる能はずして、四面楚歌の聲と共に空しく咳下の露と消ねたるにあらざるや、

之を主にありては人心を綜攬し、臣にありては意氣に感動し、所謂兩者相合し、君臣一体と化し、始て後世の偉業を奏し、千古不朽の英名を轟すを得るなり、我輩太閤の如き、蓋し其人と云ふべき歟、其よく微賤より起りて關白の職に登り、位人臣の榮を極めたるは、要するに此英雄の宏量あるに基くや火を視るよりも明なり、彼が家康を待つ優待厚遇に至る所なし、これ天下を取るに急なるものありと雖も、人心の綜攬は英雄の秘訣關鍵たるを知るに由るなり、眼光眞に炬の如しと謂つべし、伊達氏の如き、加藤氏の如き、前田氏の如

き皆其意氣に感じ、至誠に激したるものにあらざる何ぞ、殊に前田氏にありては主従の關係よりは、寧ろ友情の花より

も月よりも、濃厚なるものあり、兩者少年の時より共に織田氏に事へ、其主を一にし、膝を交えて互に高名手柄を誇り、談笑四隣を驚かせし時あらむ、其交感の消息固より窺知すべからざるなり、既にして織田氏兇徒の手に斃れ、柴田氏滅亡の時より、前田氏始めて秀吉に臣屬たるの外形を組成し、一舉一動悉く自由を失ひ、隨使せらるるの感ありと雖も、人生意氣に感するの勢力、牢として抜くべからず、頑として動かすべからず、其根柢の深き容易に測り知るべからざるあり。要するに、風雲の際會、君臣の適合以て千古絶大の偉業を企成するもの僅に「人生感意氣」の一句五字以外に出でざるなり、名に奔り利に耽るの徒輩固これ大事を語るに足らざる蠢々たる動物のみ、度量宏闊、磊々落落として須らく大海の如く、細流を運ばず、悉く網羅するにあらざれば、焉むぞ不朽の英名を萬古に貽すを得むや、

顧ふ 應仁以後、紛々擾々、麻の如く亂るゝに及びて社會の秩序頽敗し、上下の風俗紊亂する時にあたり、端なく武門の間一點の光輝を放つもの「人生感意氣」の一句是れ、これ應に當時武門に於ける燦然たる寶玉として、爛熳たる美花として、宜く特記して可也、更に一面より之を考れば、封建の餘習をして幾百年の命數を長からしめたる不死の妙藥と稱するも敢て不可なからむか、今當時に於ける主従の關係密なる者を列擧せむか、一に

て足らずと雖も、武田氏の馬場に於ける、上杉氏の直江に於ける、石田治部の島左近に於ける如き其最なるものにして、白刃の下水火の危に臨む、從容自若、其死を怖れず、其難を避けざる所以のもの、全く君臣意氣投合の然らしむる所、余輩は前田大納言をものするに當り、殊に一層の感を深ふするものあり、伊達氏、加藤氏の如き、敢て知遇の感なしとせず、而も之を利家に較すれば九牛の一毛に値せずと云ふも、識者恐くは余輩の言を肯んに躊躇せざるべし、思ふに前田氏其半生の事業、多くは知遇の恩に報するの所爲にあらざるはなし、請ふ讀者試に回想せよ、三萬三千の小封より身を起して、一百有餘萬石の大藩となり、從二位大納言の榮爵に登る、人生何物ぞ、其知遇に感じ、且つ感泣せざらむと欲するも得べけむや、豊太閤の病革るに及でや、大納言の手を握り、愁然として涙を漂へ、幼主を擧げて後事を托せらる、血あり涙あり、義ある武士の意氣として、其遺言に背くに忍びんや、噫刺刺死して高漸離また筑を撃たず、古往今來、和漢其軌一なりと云ふべし、

若大納言をして、十年命數長からしめば、關ヶ原の戰爭起るに由なく、策に關ヶ原戰爭起らざるのみならず、大坂冬の陣、若くは夏の役演する能はずして、四海波靜かに、天下安穩、豊公の子々孫々は長へに流華の繁華と共に其隆盛を競ひしならむ、惜むべし狡猾の徳川をして却て名を成さしめ、靈柩冷かならず墳墓未だ乾かざるに豊公の偉業は、落日西風と共に蕭條寂莫の裡に葬られれぬ、嗚呼幽明界を異にし兩雄

信界

智識と疑惑

赤松天風

私は平素自分の勇氣の衰へることを深く耻ぢて居る者ですが、殊に近頃古代の偉人高僧の傳記を読んで益々事を爲すには非常の勇氣が無くてはならぬと云ふことを感じ、一方では愈々我身の不甲斐なきことを覺りまして、私共の信仰の成立せないのであるが爲めであると思ひました、それで私から私は始終「何故に我に勇氣が乏しきや」と云ふ問題を念頭に掛けて居ります。

或日のことです、私は佛前に正信偈を拜誦して居りまして「生死輪轉の家に還來するは決するに疑情を以て所止と爲す」と云ふ文に及びまして俄に上の問題が釋けたる様に感ぜられ心に光ある様に思はれました、即ち私共に疑惑の情があるから何事を爲るにも勇猛精進でない、否、勇猛精進になれぬのであります、之れは畢竟疑惑は始終臆病であるからだと考へます。

そこで如何にして疑惑が私共の心中に生ずるのであるか」と云ふことを考えました之れは當然の討究であると思ひまし

て日常のことに鑿みて見ますと疑惑の情は何時も希望と恐怖との争闘から起るものと思ひ定めまして、即ち心の中で一つの目的を達し得らるゝと云ふ觀念と或は達し得られまいと云ふ觀念とが思想の法庭に争ふて然も何れも宣告が下らぬ所から起るものであります、私は信念の修養に就て少し此事を話したい。

惛、人間は感情の動物でありまして苦を厭ひ樂を忻ふと云ふのは人情の常であります。所がアノ英國の有名な文豪ジョンソンの書た「ラセラス」と云ふ小説の中に謂つてある通り自分が未だ出遭ふて感じない先きから其苦痛を恐れ、又前途に如何な不幸が起るかと思つて怖る懐くものであります、それです。若し一旦其苦痛を想像すると不安心でたまりません、さうか此の不安心を取り去りたいと云ふ欲望が生じて來ます、つまり不安心であると苦いからであります、そこで此の不安心を取り去ると云ふ目的を仕遂げるに付ては自分將して此の目的を達し得るだけの力があるか無いか、謂ひかへると此の理想を實現する所の可能性があるか無いかと云ふ事を考えます、考へた結果若し可能性があるにしても甚だ微弱なものであると自覺すれば夫れは畢竟其目的を達し得られないかも知れぬと云ふ恐怖の念が生じます、若又可能性が充分であると自信すれば希望の念を生じて遂には期望となりませ、所が此の二つの場合に想像が均等の勢力を以て誘ひかゝると何れもが全勝を意識内に占めさせんから茲に疑惑が生ずるのであります。

私共が確乎たる信仰を得ずして生死海に漂泊して居るは半自力、半他力の域に止まつてをるからです、即ち自分は成佛も得べき可能性を有つて居ると確信を得せず、又それか云ふて全然我身を謙遜して佛の慈悲に依頼を爲さないからであります、之れと申すのは佛智見を得て目的理想に對して確然たる判断を下し得ないからです、智識は信仰でありませぬ、けれども信仰を確立する唯一の方便であります、要するに疑惑は萬事を仕遂げる上に就ての第一の禁物です、其疑惑は吾等の智識が不充分を爲めに一刀兩斷の判決を與へ得ないからであります、疑惑の我が光明の我に至るには疑惑を排除するが緊要であります。

家庭

育兒談

(つゞき) 白山生

◎小兒授乳の話は以上で止めて、次には種々の注意を雜駁に申さうなら、昔は小兒は頭髪は七夜に剃り落して、夫から時々丸剃にしたものであるが、夫は甚だ危険である、申すまでも無いが、小兒の皮膚は薄く柔かな弱いものであるから、些細な刺激にも至て感じ易い、此感じ易い弱い皮膚へ直接に外界の空氣が觸れると云とは、極寒酷暑の候は言ふに及ばず、假令温暖中和の氣候の時でも、随分氣候に急變もあるものであるから、腦を刺激することの多いものである、小兒に腦膜痰

等の急病にかゝるのが多いのは、種々の原因もあるけれども此剃髪といふことより、風邪を感じて夫から起るものもあり、又直に腦を侵すものもある、又夫で無くとも、剃髪は大抵睡眠の間にするけれども、其最中に小兒が目を覺まして動くとか、又剃り人が過て怪我をさせたりすることも亦随分有るものである、此れが又危険な結果を引き出すことがある、又此頃は理髪店等では消毒に注意する様に成たが、剃刀に細菌などが附着して居た爲に危険を惹き起すこともある、何れの點より言ふも、初髪は剃り落さずして、大抵長くあるまでは、捨て置いて、餘り長く成たら、刈らせる方が危険の度が少くて宜しいのである。

◎小兒の沐浴の事は矢張り注意せねばならぬ一條である、従前は生後七夜に一度湯に入れ夫れから又五日か三日づ、經ねば入湯させぬ習慣で有たが、それは矢張りよろしくない、入湯は毎日させるがよろしい、其沐浴させるには、湯が鹹から沐浴させて居る時間等は餘程注意せねばならぬ、尤湯の温度は大抵誰にでも知れるものであるが、沐浴時間は餘り短かくて本常に暖まらぬ前に出せば風邪に冒される、又餘り長過ぎれば、湯氣に上ることがある、何れ初めから、素人で沐浴はさせられぬから、生後暫くの間は産婆を頼まねばならぬ、其後素人が自身に入浴させる様にならねばならぬから、善く入浴させる鴨梅を見て置くが善い、分らぬ所は善く聞いて置いて夫策なきせぬ様にせねばならぬ。

◎衣服の事は、如何なる富貴の家でもあまり結構なものを着

せるには及ばない、孩兒の間は色々の事で汚れ易い、して又皮膚が薄弱であるから、皮膚を刺激して皮膚病などの起る恐れがある、依て根柢よく洗濯をして垢染みなどの着せぬ様にし、又品物は上等でも肌さばりの冷かなものは善くない、成る丈け暖かなのを擇み柔かなのを取らねばならぬ、例を言へば縮緬よりも寧ろメリンスの方が小兒には適して居るかと思へる、前にも度々云ふ如く小兒の皮膚に薄弱で外界の刺激に堪へる力は乏しいから、氣候の劇變に會しても善い様に、夏でも冬でもフランネルを下へ着せて置くなどは最よろしいのである併しながら餘りイタワリ過ぎて、弱い皮膚をいよいよ弱くしてもならぬ、氣候のよい時分に折々戶外へ出して風に堪へる様に馴れさせねばならぬ、其邊の呼吸は冷暖自知といふことがあるが、餘程六ヶしい加減ものである、要するに善く注意をするといふより外は無、注意さへ怠らなければ、自ら適度に出来るものである。

◎乳母車 近來孩兒を乳母車に載せて引くことが流行る、あれは善くない流行である、尤富貴な家で特別に立派な完全な車を注文して、挽く人も餘程注意してヤワ／＼と挽けば宜しからう、併し出來合の粗末な車へ小兒を押し込んで、不注意な守子守女に任して置くなどは危険千萬である、出來合の乳母車といふものは實にバネもろく様付けてなく、車輪が少しでも動揺すれば其だけ直に車上の人に動揺する、石ころなどある上をがた／＼挽いたり推したりすると、其動揺が上の小兒に直接に及ばし、腦を刺激して腦膜痰などを引き起す、あ

